

III

まとめと今後の課題

まとめと今後の課題

以上見てきたように、2007年度の教育系各大学院において「教科実践力」教科の取り組みは相当数行われており、その多くはある程度の歴史的経緯を持っている。

言い換えれば、教員養成系の大学院修士課程における「教科実践力」強化の取り組みは、この種の大学院が整備されてきた1980年代・90年代からの基盤を持つ息の長い取り組みである。もとより教員の実践力強化のための大学院として教員養成系の修士課程が設けられたときから、そのアイデンティティは教科教育にあったとさえいえる。

ただし、それが息の長い取り組みとして定着するためには、教科横断型の組織、あるいは大学院の教育組織の中での「教科教育」「教科専門」の組織的連携、あるいは大学院と附属学校等の相互の連携といった、ある程度組織的な「仕掛け」が必要であることもまた確かである。担当者の単発の「熱意」だけに依存するような取り組みは、組織として長続きしないのである。

折しも教職大学院の発足を控え、教育系大学院の改組転換に関わる話題はホットなものになっている。しかしながら、それが単なる制度的な帳尻合わせに終わることなく、それぞれの教師たちが、実践力をアップさせて今後の教育現場を担うという大目的の中に、「教科実践力」強化の取り組みは位置付くべきものであろう。この点は今後注意を要する課題である。

今回の調査に当たり、各大学のご担当者には大変お世話になったことを最後に記して謝意を表する次第である。

(岩田康之)